

6 国 語

国 語

注 意

- 1 問題は **1** から **5** までで、12 ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読むではいけません。
- 4 答えは全て解答用紙にHB又はBの鉛筆（シャープペンシルも可）を使って明確に記入し、**解答用紙だけを提出しなさい。**
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問のＡ・イ・ウ・エのうちから、最も適切なものをそれぞれ一つずつ選んで、その記号の ○ の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 6 答えを記述する問題については、解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書きなさい。
- 8 **受検番号**を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の ○ の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。

1

次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 花瓶に挿した一輪のバラを部屋に飾る。
- (2) 主張の根拠を明確にして意見文を書く。
- (3) カメラを三脚に据えて記念写真を撮影する。
- (4) 歴史的に価値のある土器が展覧会に陳列される。
- (5) 絵本を読み幼い頃の純粹な気持ちを思い出した。

2

次の各文の――を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 大正時代に建設されたレンガ造りのヨウカンを訪ねる。
- (2) 心を込めてソダてたトマトが赤く色付く。
- (3) ホテルのキャクシツへ自分の荷物を運ぶ。
- (4) 駅前のバイテンで温かい飲み物を買う。
- (5) 満開のサクラを眺めながら公園を歩く。

3

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに「注」がある。）

亜紗、凛久、晴菜、深野は茨城県の高校生で、天文部に所属している。凛久が転校することを知った亜紗たちは、親交のある長崎県と東京都の中学生と協力し、全国の中学生をオンラインでつなげISS（国際宇宙ステーション）の観測会を計画していた。観測会前のある日、凛久が自作した望遠鏡による天体観測を、凛久の姉である花楓も呼んで行うことにした。

著作権の関係により、本文は表示していません。

著作権の関係により、本文は表示しておりません。

著作権の関係により、本文は表示しておりません。

著作権の関係により、本文は表示しておりません。

著作権の関係により、本文は表示しておりません。

(辻村深月「この夏の星を見る」による)

〔注〕 ナスミス式望遠鏡——天体望遠鏡の形式の一つ。

輿——長崎県の五島天文台チームのメンバーとは元同級生で、東

京都の御崎台高校に転入した東京都チームのメンバーの一人。

窓——パソコンのデスクトップ上で開かれた画面。

円華や武藤、小山——長崎県の五島天文台チームのメンバー。

静謐——静かで穏やかな様子。

柳——御崎台高校に通う、東京都チームのメンバーの一人。

〔問1〕「あーっ！」⁽¹⁾ 凜久の声だった。ISSの光の点が完全に視界

から消え、あとには、冬の星座と、赤く点滅する飛行機の光だけが残った空を仰ぎ、大声で、凜久が叫んだ。とあるが、この表現について述べたものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 観測の余韻を残す夜空と凜久の声を対照的に描くことで、転校を受け止めきれず衝動に駆られる凜久の様子を強調して表現している。

イ ISSの光と飛行機の光とを交互に描くことで、天文部の仲間が凜久の転校に様々な感情を抱いていることを表現している。

ウ 星座と飛行機の光の強弱の変化を明確に描くことで、天文部の仲間と観測会を成功させた後の凜久の心情の変化を表現している。

エ ISSの光と凜久の行動とを順序立てて描くことで、実際に観測したISSの姿に凜久が大いに感動している様子を表現している。

〔問2〕⁽²⁾「なんだか無性におかしくなって、泣きながら笑ってしまう。」

とあるが、この表現から読み取れる亜紗の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 凜久の気持ちを引き出すために冷静に会話する深野と比較して、感情的になってしまった自分のことを恥ずかしく思っている様子。

イ 深野からの質問の答えに窮する凜久の姿を見てほほ笑ましく感じ、凜久が転校することへの悲しみがすっかり晴れている様子。

ウ 思ったことを素直に伝えて凜久の気持ちを引き出した深野の姿が痛快で、悲しい気持ちが少し明るくなっている様子。

エ 深野と軽やかに会話をする凜久の姿を見て、心配しているほど悲しむ必要はないのかもしれないと思いついて安心して安眠している様子。

〔問3〕⁽³⁾「心細そうに聞く声に、一度引いた亜紗の涙がまたこみ上げてきそうになる。」とあるが、このときの亜紗の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア これまで転校の不安を口にできなかった凜久が、仲間を頼ってようやく素直な気持ちを表すことができたことにほっとする気持ち。

イ ずっと一緒だった自分たちに伝えなかった不安をオンラインの仲間には吐露する凜久の姿を見て、自分をふがいなく思う気持ち。

ウ 凜久の存在をようやく身近に感じることができたのに、もうすぐ離れ離れになってしまうという現実には打ちひしがれる気持ち。

エ 凜久の存在を改めて感じたことにより、一人で不安を抱え続けてきた凜久の心境を押し量りやるせなく思う気持ち。

〔問4〕⁽⁴⁾「私も卒業ですよ。」とあるが、晴菜先輩がこのように言ったわけとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 環境が変わっても、ISSの観測に共に挑んだ全国の仲間や天文部の仲間たちのことを忘れないでほしいと凜久に伝えたかったから。

イ 一緒にいた仲間たちとの関係はずっと続くと確信しており、たとえ離れてもきつとつながっていられると凜久に伝えたかったから。

ウ 天文部の仲間たちに対する願いを打ち明けることで、凜久だけでなく卒業を控えた自分のことも勇気付けてもらいたいと思ったから。

エ 自分も卒業のために仲間たちと別れることへの心の整理がつかずに寂しい気持ちでいることを、凜久にわかってほしいと思ったから。

〔問5〕⁽⁵⁾「その声を全身で受けて、空を見上げながら――。」とあるが、この表現から読み取れる亜紗の様子として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア たくさんの拍手や声を聞き、ISSの観測に全力を注いだ日々が、全国の仲間と喜びを共有する形に結実したことを実感している様子。

イ 全国からの反響に驚き、次回の観測会も最高のものにしたいと気持ちを切り換え、目標となる星を早く決めようと思っている様子。

ウ 全国の参加者がISSを観測できたか心配であったが、成功の知らせがパソコンから聞こえてきて、心が軽くなっている様子。

エ 拍手の音や声を聞き、全国の参加者が自分のことを一斉に賞賛してくれていることに感動し、誇らしく思っている様子。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに「注」がある。）

ヒトは、食べていくという生き物にとって最重要な仕事の点で、絶対に一人では生きられない生物だということは、ヒトの進化を理解する上で決定的に重要な鍵であるに違いない。（第一段）

これまで、動物の行動の進化を研究する行動生態学では、^{*}利他行動の進化について様々なモデルを考えてきた。しかし、これらすべてのモデルが暗黙に仮定していたのは、個体は基本的に一人で食べていけるということだ。ヒトはそうではないのだとしたら、ヒトの様々な行動の進化を考察する時に、動物のモデルをそのまま当てはめるわけにはいかないだろう。（第二段）

今回は、ヒトが共同作業を行う上での基盤となる能力である、三項表象の理解について取り上げたい。この能力は、言語や文化といったヒトに固有の性質の基本に横たわっていると、私は考えている。（第三段）

まだ言葉も十分には話せない小さな子どもが、何かを見て興味を持ったでしょう。その子はどうするだろう？ そちらを指さしたり、手を伸ばしたりしながら、あーあー、などと発声し、一緒にいるおとなの顔を見るに違いない。おとながそちらを見てくれなければ、かなりしつこく、おとなの注意をそちらに向けさせようとするだろう。これは、実によくある光景だ。（第四段）

その声や動作に気づいたおとなは、子どもがさしている方向を見て、何故か子どもの興味を引いたのかを理解すると、子どもと顔を見合わせ、「そうだね、○○だね」と話しかける。その言葉を子どもが理解できなくてもかまわない。それでも、動作や表情、視線によって、子どもは、おとなが同じものを見て興味を共有してくれていることを確認する。そして、それは、子どもにとってもおとなにとっても楽しいことなのだ。（第五段）

⁽¹⁾ 今こうやって描写したのが、三項表象の理解である。つまり、「私」と

「あなた」と「外界」という三つがあり、「私」が「外界」を見ていて、「あなた」も同じその「外界」を見ている。そして、互いに目を見交わし、互いの視線が「外界」に向いていることを見ることで、両者が同じその「外界」を見ていることを、了解し合う。「外界」に関する心的表象を共有していることを理解し合う、ということだ。（第六段）

このように描写すると非常にややこしいが、先に述べたように子どもでもやっていることだ。「外界」をイヌとすると、子どもがイヌを見て指さし、「ワンワン」と言う。そして母親を見る。母親もそちらを見て、また子どもと顔を見合わせ、「そうね、ワンワンね、かわいいわね」と言う。あまりにも普通のことと思われるが、これが、どれだけ深遠な意味を含んでいることか。（第七段）

ヒトの心の中で行われているこのプロセスを描写すると、「私は、あなたがイヌを見ているということを知っている」、「あなたは、私がイヌを見ているということを知っている」、「そして、「お互いにそのことを知っている」となる。しかし、これを一文で表そうとすれば、「私は、あなたがイヌを見ているということを知っている、ということをおあなたは知っている、ということをお私は知っている」となる。この文章を理解するよりも、実際に子どもと目を見合わせながらイヌを見るほうが、ずっと簡単だ。しかし、この簡単なことは三項表象の理解であり、実は非常に高度な認知能力の結果なのである。（第八段）

言語とは、対象をさし示す記号であり、それらの記号を文法規則で組み合わせて、さらなる意味を生み出すことのできるシステムである。そして、対象をさし示すために使われる記号は、その対象物の性質とは無関係な表象である。たとえば、イヌを「イヌ」と呼ぼうと、「dog」と呼ぼうと、何でもよい。それらは、イヌという動物の性質とは関係なく、任意に選ばれている。（第九段）

そして、様々な記号を結びつけて、さらなる意味を生み出すための文法規則がある。だから、「ヒトがイヌを噛む」と「イヌがヒトを噛む」とでは意味が全く異なるのだ。このような任意の記号と文法規則を備えたコミュニケーションシステムを持つ動物は、ヒト以外にはいない。(第十段)

そこで、ヒトの言語の進化をめぐって、様々な議論が行われてきた。ヒトと最も近縁な動物であるチンパンジーがどこまで言語を習得できるのかを探るために、チンパンジーに対する言語訓練の実験も何十年にわたって行われてきた。その結果、チンパンジーはたくさんの任意な記号を覚えるが、文法規則は習得しないことがわかった。その他にもいろいろなことがわかった。しかし、最も重要な発見は、言葉を教えられたチンパンジーが別に話したいとは思わない、ということではないだろうか。(第十一段)

数百の単語を覚えたチンパンジーたちが自発的に話す言葉の九割以上は、ものの要求なのである。「オレンジちょうだい」「くすぐって」「戸を開けて」など、教えられたシグナルを使って他者を動かし、自分の欲求を満たそうということである。「空が青いですね」「寒い」など、世界を描写する「発言」はほとんど皆無だ。ひるがえって、言葉を覚え始めたばかりの子どもの発話の九割以上がものの要求ということはない。もちろん要求もするが、「ワンワン」「お花、ピンク」「あ、○○ちゃんだ」「落ちちゃった」など、世界を描写する。単に世界を描写して何をしたのか。先ほど述べたように、他者も同じことを見ているという確認、思いを共有しているということの確認である。つまり、三項表象の理解を表現しているのだ。(第十二段)

チンパンジーの認知能力は非常に高度である。彼らは、かなり高度な問題をも解くことができる。しかし、どうやら彼らに三項表象の理解はない、というか乏しい。一頭一頭のチンパンジーは世界に対してかなり

の程度の理解を持っているのだが、その理解を互いに共有しようとしないのである。高機能のコンピュータがたくさんあるが、それらどうしがつながっていない、というような状況だろうか。だから、世界を描写し²⁾てうなぎ合おうとはしないのである。チンパンジーが時代を超えて蓄積されていく文化を持っていないのは、このためだろう。(第十三段)

三項表象の理解があり、互いに思いを共有する素地があれば、そこから言語が進化するのには簡単であるように思う。言語獲得以前の子どもたちがやっているように、思いの共有さえあれば、あとはその対象に名前をつけていくのは簡単なはずだ。(第十四段)

また、三項表象の理解があれば、目的を共有することができる。私が外界に働きかけて何かしようとしている。その「何か」をあなたが推測し、同じ思いを共有することができれば、「せいのっ!」と共同作業をすることができ。言語コミュニケーションはその共同作業をずっとスムーズに促進させてくれるが、言語がなくても共同作業はできる。言葉の通じない外国でも、表情や身振り手振りで人々は意思疎通することができる。それは、とりもなおさず、先ほどの「私は、あなたが何を考えているかを知っている、ということ」をあなたも知っている、ということ。私は知っている」からだ。(第十五段)

チンパンジーは、みんなでサルを狩るなど、共同作業に見えることをする。しかし、本当に意思疎通ができた上での共同作業ではないらしい。他者が何をしているかを推測することのできる高度なコンピュータが、その知識をもとに互いに勝手に動いているというほうが、彼らの行動をよりよく描写していると私は思う。(第十六段)

私たちは、外界についてそれぞれが自分自身の表象を持っている。いわば個人的表象だ。それを表現するのが言語である。言語で表されたも

のは公的表象となる。その公的表象を受け取った他者は、それについて独自の個人的表象を持つ。誰も他者の心を見ることはできないので、個人的表象はあくまでもその個人しか理解できないものである。「リング」という言葉で表される公的表象は、秋冬の赤い果物、少しすっぱい、青森や長野が有名、アップルパイのもと、などである。しかし、「リング」という言葉で何を思うかは、人それぞれに異なる。(第十七段)

「自由」「勇氣」「繁榮」「正義」など、もつと抽象的な概念になると、公的表象とそれぞれの個人的表象の間には、「リング」のような具体的なものの表象よりずっと多くの、微妙な違いが生じるに違いない。それでも人々は、言語で表される公的表象でコミュニケーションを取り、共同作業を行わねばならない。その公的表象が各個人の持つ表象の最大公約数としてうまく機能している限り、共同作業はうまくいくだろう。実際、かなりうまくいっているからこそ、この社会は動いている。(第十八段)

⁽³⁾しかし、本質的に、それは共同幻想なのだろう。何か探しているような素振りを見る人に対し、「何かお探ですか?」と聞くのは、本質的にはおせっかいなのだろう。人の心なんて本当は計り知れないものなのだから。それでも大方は当たっている。相手も、そう察してくれることを期待している。それが外れた時に誤解が生じ、「あなたは何もわかってくれない」という恨みが生じる。この何やかやにもかかわらず、共同幻想こそがヒトを共同作業に邁進^{まいしん}させ、ここまでの文明を築いてきたのだろう。そして、互いの思いを一致させることは、相変わらずたいへん難しい作業であり、それができた時、できない時に伴う様々な感情を私たちは備えているのである。(第十九段)

(長谷川眞理子「進化的人間考」(一部改変)による)

〔注〕 利他行動——自己を犠牲にして、他の個体に利益を与える行動。

〔問1〕⁽¹⁾ 今こうやって描写したのが、三項表象の理解である。とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 子どものさす方向をおとなが見て子どもに話しかけることは、「外界」に関する子どもの心的表象を理解することだということ。

イ 子どものさす方向をおとなが見て子どもの興味を理解することは、子どもと同じ「外界」に関する心的表象を持つことだということ。

ウ 子どものさす方向をおとなが見て子どもと同じような興味を持つことは、互いに同じ「外界」を見ていたことの結果だということ。

エ 子どものさす方向をおとなが見て子どもと顔を見合わせることは、「外界」に関する心的表象の共有を理解し合うことだということ。

〔問2〕 この文章の構成における第十一段の役割を説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア それまでに述べてきたヒトの認知能力の特徴について、言語の側面から新たな視点を提示することで、論の展開を図っている。

イ それまでに述べてきたヒトの認知能力の特徴について、チンパンジーとの共通点を挙げることで、論の妥当性を主張している。

ウ それまでに述べてきたヒトの認知能力の特徴について、チンパンジーの事例に即して仮説を立てることで、論の検証をしている。

エ それまでに述べてきたヒトの認知能力の特徴について、様々な議論の内容を要約して紹介することで、論をわかりやすくしている。

〔問3〕 チンパンジーが時代を超えて蓄積されていく文化を持つていないのは、このためだろう。⁽²⁾とあるが、筆者がこのように述べた

のはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア チンパンジーは世界に対してかなりの程度の理解を持っているが、

世界を描写する言葉を覚えることはない

と筆者は考えているから。

イ チンパンジーは言語訓練によって任意の記号を覚えるが、さらなる意味を生み出す文法規則は習得しないと筆者は考えているから。

ウ チンパンジーは高度な認知能力を持っているが、世界を描写して

他者と互いの思いを共有しようとしないと筆者は考えているから。

エ チンパンジーは狩りをするなどの共同作業はできるが、他者が何を

しているかを推測することはできないと筆者は考えているから。

〔問4〕⁽³⁾ しかし、本質的に、それは共同幻想なのだろう。とあるが、

筆者がこのように述べたのはなぜか。次のうちから最も適切な

ものを選べ。

ア

人々は言語を使って共同作業を行わねばならないと思っているが、

実際には表情などでも意思疎通ができると筆者は考えているから。

イ 人々は公的表象が共同作業でうまく機能していると思っているが、

実際には各個人の表象に微妙な違いがあると筆者は考えているから。

ウ 人々は人の心が計り知れないものだと思っているが、実際には他

者が自分の心を察することを期待していると筆者は考えているから。

エ 人々は共同作業がうまくいっていると思っ

ているが、実際には誤解や恨みなどが生じて社会は動いていないと筆者は考えているから。

〔問5〕 国語の授業でこの文章を読んだ後、「互いの思いを一致させる

こと」というテーマで自分の意見を発表することになった。こ

のときにあなたが話す言葉を具体的な体験や見聞も含めて二百

字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、や。や「な

どもそれぞれ字数に数えよ。

5

次のAは、和歌に関する対談の一部であり、Bは、対談中に出てくる鴨長明かもろちようめいが書いた「無名抄」むみょうしょうについて書かれた文章である。また、

Cは、無名抄の原文であり、 内の文章はその現代語訳である。

これらの文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉

には、本文のあとに〔注〕がある。）

A

俵たわら

基本的にはうちからほとばしり出るもの、あるいは何か自分くぐり抜けた人生上のことから宿ってくるものというのは、すごく必要

だと思うのですけれども、それが来たときにやはり言葉の技法という

か、言葉を駆使して五七五七七に常にできるように、それがいつ来て

も大丈夫なように歌人というのは普段きたえている。

久保田^{くぼた} それはあるのでしょうね。そういう心の用意というのがなくてはいいですね。

俵 ですから、そんなにたくさん宿つてないときでも、ある程度言葉の筋肉がうまく使えるようにはしておく。^{*}題詠にはそういう意味もあっただろうし、題詠といわれているけれども、これは何か宿っている歌だなと思えるものもたくさんあるところを見ると、むしろ宿っているところに題を与えられて出来た歌ではないかなと考えられますね。

久保田 ええ、そうだと思います。そういう例が定家^{ていか}の場合などにもあります。定家の場合あまりしばしばではないのですけれど時に漢文の日記、『明月記』の中に歌が出てきますが、そのときの歌というのは題詠ではない。そのときのほんとうの生の感情を、ふっと日記のおしまいに書き付けている、そういった種類の歌がある。そしてそれから間もなくほとんど同じようなテーマの題が歌会で出されたとき、それをちよつと変えて出しているという例があります。これは月の歌なのですから、そういうことを昔の人もやっています。それからそれを意識的にやった人は、——これはまた長明の『無名抄』に書かれていることですけど、——源三位頼政^{げんざんみよりまさ}がよくそれをやったのです。つまりたくさん作り溜^ためておく。

俵 それで題に応じて持ち歌の中からあれこれ選んで……。

久保田⁽¹⁾ ええ、当座に出された題に応じてちよつと手直ししてその場に出すらしい。そういうのをふつう「擬作」と言っています。そういうことを俵さんも、あるいは現代の歌人もなさいますか。句会に

は席題というのがありますよね。歌会はそのようなかたちではないわけですか、「今回はこういうテーマで詠^よもう。」というのは。

俵 まあ吟行^{ぎんこう}ですとか、そういう何か催しがあったときに「さあ詠もう」ということはありますけれど、今の歌会というのは、あらかじめ作ってきた歌をお互いに批評し合うというか、批評会ですね。でも多分昔の歌人たちも、あらかじめ作ってくるということは、あったのではないかしら。

久保田 もう用意があるのですね。この間大岡信^{おおおかまこと}さんと雑談していたら、大岡さんもそういうことを言っておられました、「いや、そんなの詩のほうもあるよ」と。七、八年かな、何年か前に作りかけの詩があつて、ほとんど出来ているのだけれど最後のちよつとがまだ出来ない。未完成でほったらかしておいたのある機会にふと思いついて「これだ」というので、それで七、八年目にやっと完成したという、そういう詩がある。だけど絵描きもそうで、有名な絵描きのアトリエに行くと、あれを描いたりこれを描いたり、作りかけの絵が相当あるのだそうです。それでそれを、半作と言うのですかね、昔の半作というのは家の建築で完成していないのを半作と言うらしいけれど、まだ未完成のを置いておいて、注文がくると「ああ、それじゃあ」というのでそれを完成して出す。絵描きだってやっているし、音楽家もそうだなって話にだんだんなっているって、このところモーツァルトブームだけれど、特にモーツァルトにそういうのが相当あるらしいというので、楽譜でインクの色が違うなどと、その追跡がこの頃の研究ではやられているらしいのです、一曲一曲いちいちすぐ完成して渡すというのではなくて、

俵 並行していくつも置いておく？

久保田 ええ、いろいろ思いつくままに楽譜に書きかけておいて、それをだんだんかたちにしていくんだそうです。すべての芸術でそういうことはありうるのですね。まあそういうものとは比べものにならないですけど、われわれの仕事だって何かのテーマで書きかけてほったらかしておくとするのはありますね。かなり長い間暖めておいて、ということも必要なんでしょう。だからそれは作品の長短にはよらないのではないでしょう(2)か。短歌の場合もそういうのはあるのではないですか。何かこういう感情を歌いたいのだけれどどうも適切な表現が得られない、それでしばらく寝かしておく。そのうちに何かの瞬間にひよっとぴたりした表現が思い浮かぶということはあるのですね。

俵 それはあります。何か言葉にできずに終わっていた以前の気持ち(きもち)ももう一度味わったときに歌になる場合も多いです。一瞬、言葉に出会って、「あつ、この言葉だったんだ」と思って歌になる場合と、もう一度同じ思いをして歌になる場合と、いろいろありますね。

久保田 それからさまざまに一つの事柄を歌い換えていくという場合もあるのですね。定家なんて人は相当にプライドが強いから、自分が前に歌ったことのあるような発想は、努めて避けるのです。それでまたま似てきてしまうと、恥ずかしいなんて自分で書き付けていますけれど、でもやはりその定家にしても「あ、これは変奏曲だ(3)な」みたいなものがありますものね。だからましてそれ以外の人たちには、一つの好みの表現ないしは似たような発想というのが繰り返し繰り返し出てくるのだらうと思うのです。

(3) 俵 その場である景色や物を見て、いろいろ感じるものがあって、こんな歌を作ったというような、作歌事情というんでしょうか、エピソードなんかがありますけれども、ああいうのもやはり普段から筋肉を動かして、いろんな言葉のストックや気持ちのストックを持っているからこそ、すつと、その場で出てくるのですね。

久保田 そうなのですね。やはりストックでしょうね。そう思います。ただ表現だけではなくて、表現以前の何かがストックされていないと、とっさには出ないのですね。

(久保田淳、俵万智「百人一首 言葉に出会う楽しみ」による)

B 俊恵(しゅんえ)はもう一つ大事なことを語りのこしてくれた。(4) 頼政が歌会で名を

あげた名歌は多く「擬作」つまり、あらかじめ準備し、練りとのえた歌であつたということである。歌会は当座詠であつても、そうした準備された歌をもっていれば、題に合わせて詠みかえることもできる。鴨長明は無名抄に、「都にはまだ青葉(あおは)にてみしかども紅葉散りしく白河の関(せき)の歌が、歌会で〈勝〉の判を得るまでのエピソードを伝えている。それによると頼政は、この歌の本歌たる「都をば霞(かすみ)とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の関」の倂(おちつけ)があまりに濃く残っているのを気にして、歌会当日まで躊躇(ちゅうちよ)を感じていたという。俊恵はその日になって相談をうけた。俊恵は歌会の場に馴(な)れた先輩として、この歌を「されどもこれは出栄(いでえ)えすべき歌なり。」と評して提出をすすめる、頼政は俊恵の励ましに喜んで「勝負の責任(5)はあなたにありますよ。」と言いながら歌会に出かけて行つた。結果は俊恵の見通しどおり好評であつた。

(馬場あき子「埋れ木の歌人」による)

C 建春門院の殿上の歌合に、関路落葉といふ題に、頼政卿の歌に、

都にはまだ青葉にて見しかども紅葉散りしく白川の関

とよまれ侍りしを、其の度此の題の歌あまたよみて、当日まで思ひ煩ひて、俊恵を呼びて見せられければ、「此の歌は、かの能因が『秋風ぞ吹く白川の関』といふ歌に似て侍り。されども是は出で栄えすべき歌なり。彼の歌ならねど、かくもとりなしてむと、いしげによめるところ見えなれ。似たりとて難すべき様にはあらず。」と計ひければ、車さし寄せて乗られける時、「貴房の計ひを信じて、さらば是を出すべきにこそ。後の咎をばかけ申すべし。」といひかけて出でられにけり。其の度思ひのごとく出で栄えして勝ちにければ、帰て則ち悦びいひ遣したりける返事に、「見る所ありてしか申したりしかど、勝負聞かざりし程はあひなくこそ胸つぶれ侍りしに、いみじき高名したりとなん心ばかりは覚え侍りし。」とぞ俊恵は語りて侍りし。

建春門院の御殿での歌合のとき、「関路落葉」という題で、頼政卿が、

都にはまだ青葉にて見しかども紅葉散りしく白川の関

と詠まれましたが、頼政卿はその歌合に際してはこの同じ題の歌を沢山詠んで当日までどれを出そうかと思ひ悩み、俊恵を呼んで歌を見せ相談されたところ、俊恵は「この歌は、あの能因の有名な『秋風ぞ吹く白川の関』という歌に似ております。しかしながらこちらの歌は、きつと歌合の席では見栄えがする歌に違いないでしょう。あの能因の歌ではないが、このようにも素材をこなして詠むことも出来るのだというように、大変上手に詠みこなしてあると見うけました。似ているからといって非難すべきような歌がらではありません。」と判断されたので、いよく歌合の当日頼政卿は車を引き寄せてお乗りになった時、「あなたの判断を信じて、ではこ

の歌を出しましょう。これからあとの責任はすべてあなたにお掛けしますよ」と言い、出かけて行かれました。その歌合においては、俊恵の思った通りにこの歌は見栄えがして勝ちとなりました。頼政卿は歌合より帰るとすぐにお札をいってよこしましたが、その返事に俊恵は「あの歌は見どころがあると考えて、あのような事を申したのですが、実は勝負を聞かないでいる間は、たゞもう不安で胸がどきどきしておりましたが、勝ったということを知って非常な面目をほどこしたものと、自分の心の内だけでは思いました。」と言われた。以上は俊恵が後で語ったことです。

(高橋和彦「無名抄全解」による)

〔注〕 題詠—— 題を決めておいて、詩歌などを作ること。

源三位頼政—— 平安時代の武将、歌人。

吟行—— 詩歌・俳句を作るために、名所等に出かけて行くこと。

大岡信—— 日本の詩人、評論家。

変奏曲—— 一つの主題を様々に変化させて構成した楽曲のこと。

俊恵—— 平安時代末期の歌人。鴨長明の師。

都にはまだ青葉にてみしかども紅葉散りしく白河の関——

旅立った時の都ではまだ青葉の状態で見したが、紅葉が散り敷いているよ、ここ白河の関では。

本歌—— 『新古今和歌集』の時代に盛んに行われた「本歌取り」という表現手法を用いる際の、もととなる歌。

都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の関——

都を、春霞が立つのとともに出発したが、いつの間にか秋風が吹く季節になってしまったことだ。この白河の関では。

能因—— 平安時代の僧侶、歌人。

〔問1〕 Aでは、ええ、当座に出された題に応じてちょっと手直しし

てその場に出すらしい。とあり、Bでは、⁽⁴⁾頼政が歌会で名をあげた名歌は多く「擬作」つまり、あらかじめ準備し、練りとのえた歌であったということである。とあるが、A及びBで述べられた、歌会における頼政の歌の示し方の特徴を説明したもののとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

A 頼政は、生の感情を整理して言葉にしており、歌会で出された題に合わせて技法を駆使して即座に和歌にできるようにしている。

I 頼政は、複数の歌を事前に備えており、歌会ではそのまま出したり題にふさわしい表現に置き換えて出したりするようにしている。

ウ 頼政は、事前に歌を用意しておき、歌会で修正する必要がある際に変更すべき部分をあらかじめ想定しておくようにしている。

エ 頼政は、歌会の前に相談した歌人の先輩から譲り受けた歌を、歌会で提示された題に合わせて作りかえるようにしている。

〔問2〕 ⁽²⁾短歌の場合もそういうのはあるのではないですか。とあるが、ここでいう「短歌の場合もそういうのはある」を説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

A 感情を適切に表現する言葉は、作りかけた歌をできるだけ長い間寝かせておくことでしか得ることができないということ。

I 感情を適切に表現した歌を完成させるには、ふさわしい言葉を納得するまで集中して考え続けることが大切であるということ。

ウ 感情を十分に表現しきれない未完成の歌であっても、寝かせておくことで適切な言葉が得られることがあるということ。

エ 感情を十分に表現できたと思う歌の場合でも、長い間寝かせることで適切かどうかを改めて吟味する必要があるということ。

〔問3〕 ⁽³⁾俵さんの発言のこの対談における役割を説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

A 直前の久保田さんの発言を受けて、作歌の準備について久保田さんとの共通理解を図ろうとしている。

I 直前の久保田さんの発言を受けて、作歌をする上での自分の体験談を紹介することで話題を広げようとしている。

ウ 直前の久保田さんの発言を受けて、作歌に関する久保田さんとは反対の意見を述べることで話題を転換しようとしている。

エ 直前の久保田さんの発言を受けて、作歌について自説を述べることで新たな問題を提起しようとしている。

〔問4〕 ⁽⁵⁾責任はとあるが、Cの原文において「責任は」に相当する部分はどこか。次のうちから最も適切なものを選び。

A 計画を

I 是を

ウ 後の

エ 答をば

〔問5〕 Cの中の――を付けたA、Eの「が」のうち、他と意味・用法の異なるものを一つ選び、記号で答えよ。